

指導資料

 鹿児島県総合教育センター

技術家庭(家庭),家庭 第39号

中学校, 高等学校, 特別支援学校対象
平成 26 年 4 月発行

食育の推進における言語活動の充実 - ジグソー学習を取り入れた実践を通して -

現在, 食をめぐる環境は日々変化を遂げ, 様々な食に関する価値観や情報が氾濫しており, 食に関する正しい知識や判断力を身に付けることができるよう学校においても実践的な取組が求められている。中学校(H20), 高等学校(H21)の各学習指導要領においても, 食育の推進を図る視点から, 内容の充実が図られている。

しかしこれまでも, 栄養バランスや食品添加物について学習しても, 菓子パンや清涼飲料水で朝食を済ませて登校するなど, 実生活における課題解決につながっていないという実態がある。したがって, 家庭科が目標としている「実践的態度の育成」を図ることのできる効果的な言語活動を取り入れ, 主体的な学習を展開することが必要である。

そこで, 本稿では, 食育を推進するための主体的な学習の機会として, ジグソー学習を取り入れ, 言語活動の充実を図ることにより「実践的な態度」を育成する家庭科学習指導について述べる。

1 家庭科における言語活動の充実

家庭科における言語活動の充実について, 中・高等学校の各学習指導要領の「指導計

画の作成と内容の取扱い」では, 次のように示されている。

【中学校】

「各分野の指導については, 衣食住やものづくりなどに関する実習等の結果を整理し考察する学習活動や, 生活における課題を解決するために言語や図表, 概念などを用いて考えたり, 説明したりするなどの学習活動が充実するよう配慮するものとする。」

【高等学校】

「子どもや高齢者など様々な人々と触れ合い, 他者とかかわる力を高める活動, 衣食住などの生活における様々な事象を言葉や概念などを用いて考察する活動, 判断が必要な場面を設けて理由や根拠を論述したり適切な解決方法を探究したりする活動を充実すること。」

生徒は, 知識を理解しただけでは, 行動に移しにくいので「自分にもできそうだ。」という自信や, 「した方が良い。」, 「することが大切だ。」という価値観が形成されてはじめて「やってみよう。」という生活行動に移す際の意欲が高まる。したがって, こうした自信や価値観, 更には意欲に働き掛けられるような授業づくりが求められる。そのためには, 言葉で表現する活動を個人で行ったり, 協働でコミュニケーションを重ねながら行ったりすることが効果的である。特に, 言語活動の充実を図る際に, 「話し合う活動」が重視されるのは,

生徒の様々な思考過程や判断結果を相互に理解し合い、認め合うことの必要性を表している。このような学習活動を継続的に行うことにより、生徒は自信をもったり、価値観が明確になったりして、実践への意欲が増すと考えられる。

そこで、「実践的態度の育成」と関わって言語活動の充実に求められるのは、価値観を形成し、自分自身の生活に適用しようとする意欲を高めることである。

2 ジグソー学習

(1) ジグソー学習の効果

今回は、価値観を形成するための言語活動として「ジグソー学習」を取り上げる。ジグソー学習は、協同的な学習を促すために編み出された方法である。仕組みと流れの例を図1に示す。

ジグソー学習においては、個の責任を果たさなければ全体の課題を解決することができないため、情報交換の必要性があり、学習者間の情報のやりとりが活発に行われる。全ての生徒の役割が明確であることから、全員の評価と支援が行いやすいことや課題解決時に達成感を味わわせることもメリットとして挙げられる。また、個の役割に取り組む活動において、支援が必要な生徒に対しては、エキスパート班における相互支援も期待できる。ジグソー活動においては、確認したキーワードを基に、分かりやすく説明するために図や表の活用等の工夫をすることで、役割に対する理解は更に深まり、自信にもつながる。また、全体において、結果を発表する際に、種々の方法やその根拠が示されることから、多様な価値観

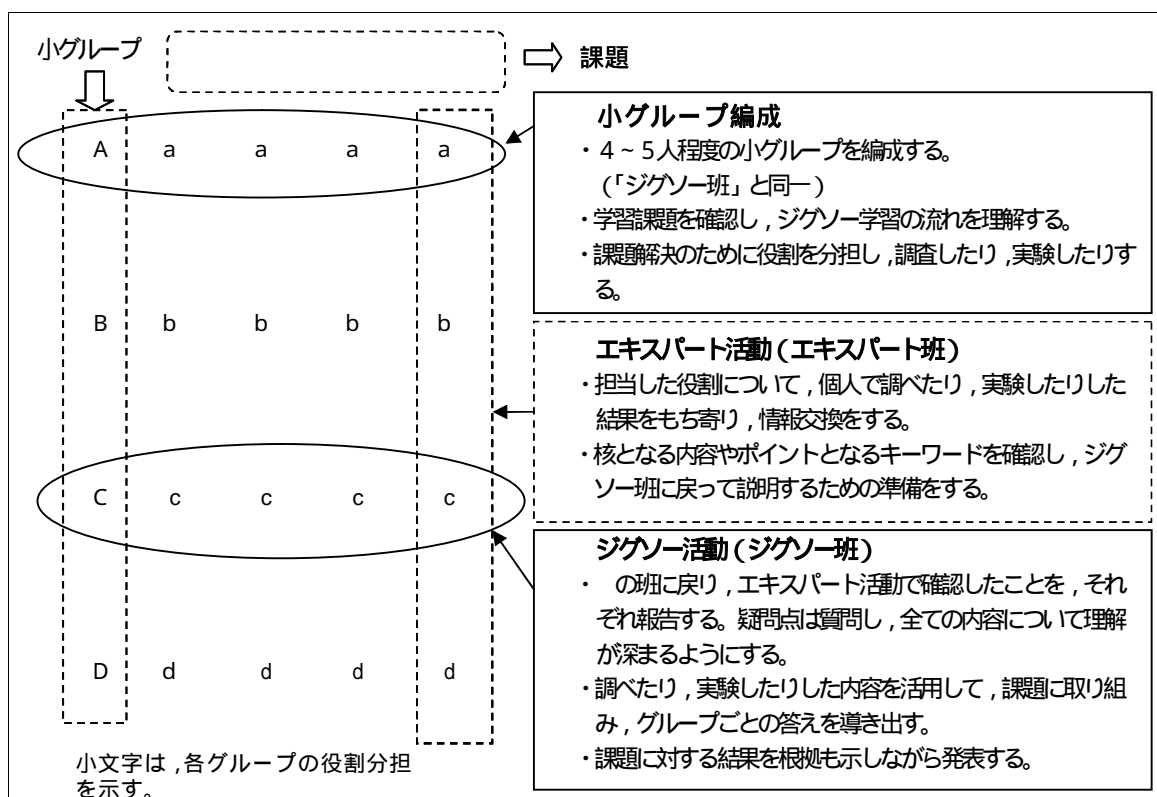


図1 ジグソー学習の仕組みと流れ

や知識に触れることにより、自己の価値観が明確になりやすいと考えられる。

(2) ジグソー学習の留意点

協同的な学習となるため、まずは、生徒の主体的な参加を促すことができる人間関係の形成が基盤となる。そのため、通常の指導においても、学習形態を工夫しながら、言語活動を効果的に取り入れた活動を行う場面を意識することが大切である。

また、学習の方法が複雑なので、十分に理解を図った上で学習を進めていくこと、全体の課題は、生徒一人一人が各々の役割を果たすことによって解決が図れるような内容にすることなどに配慮したい。特に担当した内容に対しての理解が深まりやすい傾向がある。そのため、補充的な学習や発展的な学習の工夫も必要となる。具体的な方法については、次項で示す。

3 「生涯の健康を見通した食事計画」における実践

(1) 「食事の計画」の指導

家庭科では、生涯を見通した食生活の管理運営ができるようにすることを目標として、「献立作成」の学習を行っている。各校種において、小学校「1食分の献立」、中学校「中学生の1日分の献立」、高等学校「家族の毎日の献立」の作成ができるように、系統立てた指導となっている。

食育の観点（詳細は「食に関する指導の手引 - 第一次改訂版 - 平成22年」を参照）では、特に心身の成長や健康の保持増進の上で、望ましい栄養や食事のとり方を理解し、自ら管理していく能力を身に付けることを内容としている「心身の健康」との関連が深く、「実践的な態度」の育成が強く望まれる観点である。

そこで今回は、高等学校「家庭総合」における単元「生涯の健康を見通した食事計画」の指導例を提案する。

なお、「家庭総合」(4)生活の科学と

表1 高等学校共通教科家庭「家庭総合」(4)生活の科学と環境 ア「食生活の科学と文化」 指導内容一覧(例)

学習指導要領との主な関連	単元名	主な学習項目	時間
(ア)	食生活について考える	・「食べる」ということ ・食生活の振り返りと現代の食生活の傾向と問題点	2
(イ)	食事と栄養・食品	・日常的な食品の栄養的特質や調理上の性質	8
(イ)	安全な食環境	・食品の腐敗，食中毒，食品添加物 ・食品の鑑別，保存と管理 ・社会における食の安全確保の仕組み	4
(イ)	調理実習	・食品成分の変化に伴う，色，味，テクスチャーなどの変化 ・調理法の特徴及び調理器具の特徴や取り扱い方 ・基本的な調理技術 ・環境に配慮した調理	10
(ウ)	食生活の文化	・行事食，郷土食，伝統的な食品加工などの食文化とその背景及び継承 ・食文化の視点から捉えた日常食の盛り付け方や配膳の仕方，食器の種類と特徴 ・様々な地域や外国の食文化	2
(ア) (イ)	生涯の健康を見通した食事計画	・青年期の食事の重要性 ・各ライフステージの栄養的特徴，課題及び食事摂取基準や嗜好の変化 ・食事摂取基準や食品群別摂取量の目安を活用し，経済，能率，家族の嗜好などを考慮した献立の作成	8
(エ)	これからの食生活	・食生活を取り巻く環境の変化と問題点 ・生産から消費に至る過程における食の安全と衛生 ・環境負荷の少ない食生活の在り方	4

(ア)人の一生と食事 (イ)食生活の自立と調理 (ウ)食生活の文化 (エ)食生活と環境

環境 ア「食生活の科学と文化」の指導

内容は表1に示す。

(2) 単元の目標と指導計画

ア 目標

単元の目標は次のとおりである。

乳幼児から高齢期までの各ライフステージにおける栄養的な特徴や食生活の課題、食事摂取基準、嗜好の変化などについて理解させる。

自分の食生活を振り返り、青年期の食事の重要性について理解させる。

食事摂取基準や食品群別摂取量の目安を活用し、経済、能率、家族の嗜好等を考慮した献立を作成するために工夫している。

イ 単元の指導計画

単元の指導計画を表2に示す。

表2「生涯の健康を見通した食事計画」の指導計画(全8時間)

次 (時間数)	主な学習活動
第1次 (1)	長期休業の課題で作成した弁当の献立と写真を基に自己評価、相互評価を行う。
第2次 (1)	食事摂取基準や食品群別摂取量の目安を活用し、自身の弁当献立を基に、条件を合わせた青年期の弁当献立を作成し、発表する。
第3次 (1)	課題「Aさん家庭(図2参照)に提案する献立を作成する」ために、役割を決め、ライフステージごとの栄養的な特徴や身体的特徴等を調べる。
第4次 (1)	同じライフステージを担当した者が集まり、情報交換を行い、核となるポイント等を確認する。 (エキスパート活動)
第5次 (1)	通常のグループに戻り、ライフステージ順に特徴等を説明する。 (ジグソー活動)
第6次 (2)	Aさんの家庭に提案する献立を考え、発表の準備をする。
第7次 (1)	各班の成果を発表し、個人で振り返りを行う。

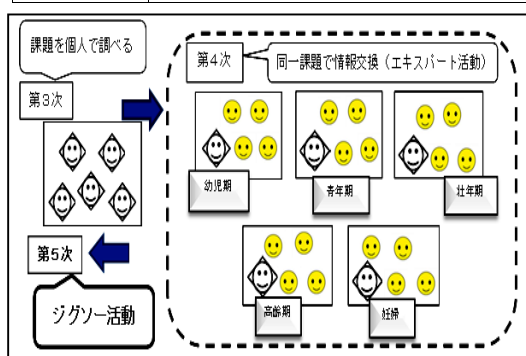


図2 本単元におけるジグソー学習

(3) 単元における工夫

高校生の実態を考慮すると、各ライフステージにおける栄養的な特徴等を踏まえつつ、「家族の献立」を作成することは、大変難しい課題である。そのため、「食品群別摂取量の目安」の目標値に近付けた献立作成にとどまってしまうことが予想される。そこで、図2のような「Aさんの家庭に提案する献立作成」を課題解決の場面として設定し、各ライフステージの栄養的な特徴等を踏まえ、解決策を見出し、認め合う機会とすることは、実践への移行を促すと考えた。

特に、調べた内容を活用して家族の献立を考えることで、担当以外への理解を深める補充的な学習となることなども期待できる。また、経済や家族の嗜好など、多面的な視点から検討する機会にもなる。考えを比較分析したり、内省したりしながら修正することで、広く深い理解を養う機会となり、「した方が良い」という価値観が形成され、実践への意欲が高まることが期待できる。

従来から家庭科で扱ってきた内容のほとんどは、食育の推進に大きく関わっている。今後も、言語活動を日常的かつ効果的に取り入れ、食生活を主体的に営む実践力を培うことにより、食育の充実が図られることを期待している。

- 引用・参考文献 -
 文部科学省『中学校学習指導要領解説 技術・家庭編』平成20年、教育図書
 文部科学省『高等学校学習指導要領解説 家庭編』平成21年、開隆堂
 文部科学省『言語活動の充実に関する指導事例集～思考力、判断力、表現力等の育成に向けて～【高等学校版】』平成24年『中等教育資料』平成23年8月号、学事出版

(教職研修課)